通信第六十六号　落としてくれてありがとう

　地球温暖化がはっきりと知らされる日々となりました。人類の危機が内外で叫ばれて来ました。私を含めて便利ではありますが不自然な生活をしています。山でも空から見るとはげ山の如くアスハルトの道が頂上まで続いています。人間が一番地球を傷つけているのは明白です。どことなく未来に不安を抱えて生活されている方が多いのは当然なことでありましょう。さらに自分自身の人生のよりどころは何か。壊れていくものをよりどころとしていないか。危ういところであります。変わらないよりどころの教えがあり、よき師よき友があることは幸せなことであります。

　さて、私達は新潟の本願道場を終え、七日、八日の長仁寺皆作法要を勤めさせて頂きました。最後に責任総代の上原誠二さんの「寺族全員参加での在り方に感動しました」とのご挨拶に私が感動しました。三十年前、いや十年前の長仁寺では考えられないことです。内陣や屋根瓦など外の事でも様変わりしましたが、何より家庭のきずな、門徒さんとのきずなの背後にご本願が生きてはたらいていることが嬉しいことです。それぞれのお役を精一杯されている姿が美しいのです。

ところで、私たちは十二日のリモート法座を終え、十三日の婦人会法要が終わるとすぐに中津駅へ向いました。三重県の松林寺さんは十四日の朝から始まるため前日に行かないと間に合わないので十三日中に着く汽車に乗りました。十一時過ぎに豊津上野駅に着くと森順英（松林寺）さんが駅に迎えに来ておられ、そのまま「」という温泉に連れて行ってくれました。毎回連れて行って下さるここの湯は本当によく疲れが取れます。寺についてから座談が弾み夜中の一時を過ぎていました。

森さん自身が以前の私たちのように内外に多くの問題を持っておられるため真剣です。人間の努力ではどうにもならない問題がいかに大事か。曇鸞さまの

無碍光の利益より

　　　威徳広大の信をえて

　　　必ず煩悩の氷とけ

　　　すなわち菩提の水と成る

　　罪障功徳の体となる

　　　氷と水のごとくにて

　　　氷多きに水多し

　　　障り多きに徳多し

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　聖典４９３頁

私達が長仁寺をご縁として実験させられて来たことです。森さんとのご縁は帰寺する前からですから四十年位たちます。私たちの在り方をよくも悪くもずっと見て来ておられます。ですから本願に救われるという事はどういうことになるのかよくわかるはずです。本願道場のご縁を森さんが深く喜ばれ、熱心に呼びかけをして下さるので遠くからの人や真剣な求道者が集まってきます。それに応じて私自身が育てられるのであります。

翌朝は海まで散歩に出かけるのですがこの度は私の腰痛と雨のため行けませんでした。この地域も温暖化のため海流が変わり魚や貝がとれなくなり、この二十年間で地域もすっかり様変わりしたとのことです。若い人や漁師も少なくなり空き家がたくさんあることを散歩のたびに知らされました。どこか淋しさがう地域のよりどころに寺がなっていけるのか。

先日地区の役員会の帰り道で「散歩で長仁寺の前を通る時、寺のご本尊に道から合掌するようになったよ」と言われて嬉しい気がしました。また実際に道から何か合掌して話しかけている姿を見たことがあります。地図の寺の卍マークは「幸福を示す記号、吉祥万徳の集まるところの印とする」と辞典に在ります。浄土真宗では本願が生きてはたらいているか、浄土が生きてはたらいているか。深い不安や、恐怖、闇の中でこそ本願の光、み力がためされるのです。歴史の事実として、浄土真宗は戦乱や飢饉など困り果て世間の価値が壊れた時に真実の心のよりどころとして盛んになってきたのです。松林寺さんを場としてご本願がいかに展開されていくか日々お試しであります。

　　の（常のともしびを灯という。大きなる灯を｟たいまつ｠という）なり

　　　くらしと悲しむな

　　　のなり

　　　重しとかざれ

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　聖典５０３頁

十四日の朝席が終わった時、刈谷の水本さんが「今夜は刈谷にまり、明日は昼一時半に帰られたら早く帰れますよ。腰の負担が少なくなりますよ。そうしたらどうですか」。「しかし、重たいキャリーバッグがありますよ」「それくらい私が持ちますよ」という提案をされました。その勢いに「私はどちらでもよいので、森さんと相談してください」と言いました。森さんは夜の準備をしていたようです。そして十五日の朝、車で刈谷へ行く予定でした。水本さんが私の前で、頭を下げて頼まれました。森さんもいやとは言えず「わかった」ということで、急に日程が変更となりました。

昼席が終わり、豊津上野駅まで森さんが送ってくれました。名古屋駅まで、水本さん、田中秀法さん、森はる美さん、梅本さん、水上さん、川口さん、法喜、常照。八名で名古屋駅まで行きました。八十二才の水本さんが重いカバンを引きずって階段を上られる姿に驚きました。大石先生について、北海道やブラジル等、したことが思い出されました。

刈谷市の水本さん宅は多くの人が出入りしやすい雰囲気があります。いつもご参詣の同行さんに故水本健太郎さんの奥さんのスミさんがおいしい手料理のおをふるまってくれます。サンガのかい空気が充満しています。朝席が終わり、早く帰れるという事で法喜さんが大阪にいる次男の道人君に連絡を取りました。会いに来てもよい。そして私も行ってもよいという連絡を受けました。

後ろ髪を引かれる思いで、水本さん宅を後に大村祐司君のお母さんの運転で刈谷駅まで送って頂きました。大阪へは夕方着きました。道人君は現在、アパート暮らしです。私は道人君とは五年ぶりです。もちろんアパートは初めてです。法喜さんは何度も会っています。アパートの入り口でサッと恐怖心が起こりました。色々あったことがよぎったのです。私は法喜さんの後から部屋に入りました。きちんと清潔に整理されたまいです。三人座って田舎の事などいろいろ話しました。私の腰の痛いのをって柔らかい座椅子を出してくれました。

ふと、私は「世間からも、集団からも落としてくれてありがとう」と言いました。

「そう受けてくれたら、うれしい」

お互い長年のわだかまりが解かされた瞬間でした。

　近くの居酒屋に往き乾杯をしました。ビールで乾杯し、道人君がハイボールが好きだという事でハイボールを飲みました。おいしいこころの味をいただきました。こんな時が来るとはご本願のみ力のお陰であります。世間ではあまりないことでありましょう。道人君が駅まで歩いて送ってくれました。お互いに手を振ってお別れをしました。その時、学生時代に父が中津駅まで車で送ってくれ、私は駅のホームから父は２００メートルくらい離れた駐車場からお互いに手を振ったとき、不思議に父と私の間の氷が解けるような気がしたことが思い出されました。

寺に帰り着いたのは十二時ころでした。

十九日に輪読会があり、宇佐本願道場の渡辺和義さんがその日は奥さんの代わりにご参加くださっていました。道人君のことはよく知っておられ相談にも乗って頂き、アドバイスを頂いてきました。そこで、このたびの道人君と私たちのいきさつを皆さんにも聞いて頂きました。それを受けて二十五日渡辺さんからお手紙を頂きました。

前略　先日の輪読会ありがとうございました。

　法喜さんが寺報で道人さんのことを書かれていましたので、随分状態はよくなっているのだなと思っていました。輪読会でのお話では、刈谷本願道場の帰りに道人さんのところへ行かれたとのこと。常照先生も同行し、先生が落としてくれたことを感謝し、を開いてお話されたとのことです。

　六年前の状態を目にして、今日の日が来ることはなかなか想像できませんでした。道人さんも大阪で良い先生に出会われて薬も合うようになってきたとのこと。ここに来るまでいろいろなことがありましたが、皆必要なことだったんですね。「あなたが救われなさい。そうなったら万事解決する。」

　大石先生のお言葉は、長仁寺の中で実践され証明されています。

　「病識ができるということは、大変なこと、仏教でいえば信心をするようなもの」と思わず口走りましたが、病識ができないということで長期に入院している人たちをたくさん見て来たので正直な感想でした。

　離れていても、親鸞聖人、大石先生の教えを聞いて行く御同朋御同行として道人さんが深まっていくことを願わずにはいられません。

　常照先生、法喜さん、これからもよろしくお導き下さい。

　　令和五年七月二十日

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　渡辺本願道場　釈和敬

　「人の幸せを願う」というお心が流れているうれしいお手紙でした。その後、法喜さんと道人君とのやり取りの中で世間でいう万々歳とはいかないことも知らされました。よく聞いてみると病気の難しさがあるようです。しかし、どうあろうと落としてくれたご恩は甚大であります。世間から、さらに集団世間から落として下さったのです。だから大石先生に一筋に聞いてこられたのでした。世間でうまくいっていたら私の聞法は全然ちがったあり方であったと思わされます。

　　往相廻向の大慈より

　　　還相回向の大悲を得

　　　如来の廻向なかりせば

　　　浄土の菩提はいかがせん

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　正像末和讃　聖典５０５頁

人間の常識からは浄土へ往くことなど思いも出来ないことです。如来の廻向に救われたよき師に導かれて、浄土の救いが成就されるのです。そこにはこの世での脱落が裏にあります。そこを大石先生が「もう少し、智慧ちゃんと道人君に苦労してもらわんとならんのかな」と仰せられた通りでした。こういうことを言えるのは浄土の救いを得た人でないと言えることではなかったと今は改めて思わされます。

仏伝によると、釈尊の最後の教えとして

「いざ、比丘たちよ、お前たちに告げよう。『諸行はれる性質のものである。たゆまずに努力せよ』と。」

これが（釈迦）如来の最後のことばであった。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　山口益編　仏教聖典１５３頁

釈尊の遺言として有名な「自灯明、法灯明」はその直前にあります。努力せよ。とは自力的表現であります。私は長らく疑問符が付き読めませんでした。

大石先生は「禅宗でも悟後の修行が大事だと言われます。真宗でも信後の在り方が大事なのです」と教えられたことが少し聞こえて来ます。ここは法蔵菩薩さまの不退転の歩みでありましょう。私の宿業を縁として、自我の私にはわからないけれども法蔵菩薩さまのお働きが私の中で開始されるのです。日々の歩み、生活の中で試されることであります。毎日を新鮮に、清浄に浄化して下さいます。、と妙好人さんのお言葉が生きてきます。

令和五年七月末日